

応用の学としての臨濟宗学

荒 川 元 暉

1 応用の学としての臨濟宗学

臨濟宗学は実参実究による修行が基本であり学道である。

あくまでも信仰の立場に立つ宗乗の学という東洋的な学としての意を持つ。同時に近代西洋科学としての臨濟宗学がある。近代科学は、研究対象とこれを行う主体とを明白な形で分離し、その対立の上で研究をおこなうという基本的な立場に立つ。すなわち主体的に仏教学の一分野として研究すると同時に、客観的に他の人文科学、社会科学、自然科学の援用を受ける。すなわち宗学は、その任務の課題により歴史部門、教学部門、実践部門に分けられる。特に実践部門は、歴史部門と教学部門でなされる実証と理論を实地に应用するための実践学としての性格をもつ。

もともと宗学は宗門の強い現実的要請により成立したものである。当然に宗門の要請に対応できるものでなければならぬものである。宗門は、宗教的実践を生命としている。宗

門と宗学は、有機的に関連しあい、一面、相互に限定しあう。宗門は、実証的客観的な理論をもとに未来を洞察しての实践活动を宗学に期待し、宗学もまた実践を通して概念化、形骸化を免れようとする。もし、相互に乖離、違背があるとすれば考え方の革新が要請されるであろう。しかし、同時に学問としての純粹性の問われるのあまり宗学は、とかく存在価値さえ問われる。ここに宗学のもつ純粹理論的学問への反省が求められている。もちろん宗門自体に見られる官僚性化にもとづく宗門の非現実的体質に対しても変革は必要である。

私がここで本来、宗学のもつ実践性に援用しようとする応用の学は、社会学の一分野である応用社会学である。学者により用法はさまざまであるが、主として社会学理論を現実に応用して、その実態や問題を究明し、改善のための實際的手法や問題解決の方法を研究する社会学の一部門である。それがたんなる社会学理論への方法的適用ではない。一步踏み込

んで改善、改良、変革しようとする実践的実現するために理論を実践的に適用する時は、きわめて実践的な性格を帯びる。ウオードは、この考え方を代表する社会学者の一人である。

彼はその著『応用社会学』において、社会の意識的改良を目指していると言く。すなわち、現実の社会が理想の状態に向かって進歩、発展するための手段を考究する社会学の一領域であると規定し、とりわけ社会改良のために実践的に必要とされる処方箋を提供するのがその任務であると考えた。

このようにその目的、方法において著しく実践的な性格を持ち、実践社会学に近い。要するに社会生活に役立たない理論ではなくて、これを基礎として各分野における問題の提起とその解決を志向する応用的なものでなければならぬとしている。

臨濟宗においては、僧堂での修行方法として公案がある。

宗学が宗門の宗旨に関する学問であるが、知的な意味での学問であるのに対して禅堂における修行が学であり、公案によって見性成仏する。これが室内の事として工夫する独自のものである。これがいわゆる「公案禅」として形式的なものであってはならず、そこに「働き」がある実践的なものである。すなわち、僧堂にあって参禅弁道するだけではなく、作務、托鉢、典座をはじめとする日常生活自体が禅の修行であ

り、学道である。しかも僧堂での修行は、あくまでも基本であって、出家者としての雲水生活が究極の目的ではない。これはわずかな期間の生活である。本来の修行はむしろ、僧堂での修行を通して得たそれぞれが体得した基本原則をもとに、生きた社会に出て僧堂で得た基本問題の説き方を活用して任職として活動するところにある。

いうならば、この世には僧堂において体得した基本原則をもとに解かなければならない応用問題はいたるところに充ち満ちているのである。布教教化、寺院経営、葬儀、法要等、すべて人間の意識を教化し、あるべき方向に革新すべき課題がある。これの解決方法の基本を体得するのが僧堂での修行である。しかし、実地である社会での解決方法は、応用学である任職学である。それは久松真一の述べるように修行により得たものは「働きのある知」でなければならぬ。およそ働きのない知識はあり得ないのであって、知と行とはあくまでも一如である。

2 パラダイム革新

今日、パラダイムという用語が広く用いられている。パラダイムという語は、ひろく「思考の枠組み」をいう。また「範型」ともいう。もともとは、ギリシャ語で「モデル、パターン、範例」を意味した用語である。これが言語学におい

て、語形変化表を意味する概念となった。今日、用いられている学問的用語はアメリカの科学史家クーンの提唱した科学用語である。クーンは、ハーバード大学で物理学の学位を得てから科学史に転じ、ハーバード、パークレー、プリンストンを経てマサチューセッツ工科大の哲学・言語学教授であるが、一九六二年『科学革命の構造』を著わし、「パラダイム」「通常科学」「科学革命」を説いた。このパラダイム概念は、科学論・学問論に大きな影響を与えた。クーンのパラダイム論は哲学者をはじめ社会科学者によつて、また一般知識人により拡張使用され、俗用され、「思考の枠組み」として広く使われるところとなった。

クーンは、『科学革命の構造』のなかで「パラダイム(paradigm)」とは、一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」と定義している。クーンは、科学の発展をパラダイムの成立と解体の過程としてとらえようとしている。パラダイムが形成されている時は、科学者集団は、そのパラダイムに準拠して同じルールと基準にもとづいて思考している。科学も「通常科学」としての研究活動をしている。しかし、次第に従来のパラダイムでは説明できない問題が生じてくると、そのパラダイムは危機に瀕し新しいパラダイムにとってかわられる。これを「パラダイム革新」という。とくに、これが生ずる時は

「パラダイム・クラッシュ(crisis)」が起こるといふ。この考え方を臨濟宗学のなかで見ることが出来る。

3 『臨濟録』に見るパラダイム革新

臨濟宗学はすぐれて実践学としての性格を多分に持つ。それはなによりも現実の社会生活を送るわれわれ人間の意識の革新を目指している。これはまさしくクーンのいう「パラダイム革新」であると考える。これを臨濟宗学の宗祖ともいふべき臨濟禪師の『臨濟録』に見ることが出来る。『臨濟録』は、中国唐末の禅僧、臨濟義玄(一八六〇)の言行録である。当時の社会的情勢は臨濟の思想に大きな影響を与えている。六朝から唐の中期にいたるまですべて王室ならびに貴族階級の厚い保護と政治的経済的な支持のもとに栄えた。しかし、しかし、唐の玄宗の末に起こった安祿山の乱を契機として、これまでの貴族社会は崩壊しはじめ、新しい社会の実力者である土着の地方官の手に移った。そこで起こったのが会昌の破仏(八四一七)であった。武宗の極端な破仏で中国仏教各派はほとんど壊滅し、祖師禅の一派のみがにわかに盛んになった。臨濟ならびにその後に登場する趙州はこのようなパラダイム革新の時代にあつて、河北の新興武人社会を背景に興隆した。この臨濟の教えはいかなるものにも惑わず、真に自由な生き方をする自由無碍なる「一無位の真人」の生

き方である。それは過去の生き方に惑わされることのない主体的な生き方である。

(1) 一喝

上堂。僧問、如何是仏法大意。師堅起拈子。僧便喝。師便打。又僧問、如何是仏法大意。師又堅起拈子。僧便喝。師又喝。僧擬議。師便打。(上堂五)

「徳山の棒、臨濟の一喝」と呼ばれ、臨濟禪を象徴するものとなっており、『臨濟録』のいたるところで見られる。言葉を超えた「言語道断」の世界の表現である。言葉をもって表現できない世界を言葉をもって問うた時、同じく言葉をもつて返そうとする時、どう答えようと考ええる。そこをすかさず喝す。あるいは打つ。言葉にとらわれ、相手の言動に左右される。そこに惑いがある。擬議がある。一喝は、これまでの思考、言動をいったん停止し、真の自己自身への転換を促すものである。これはパラダイム転換である。人間は自分のこれまでの考え方にこだわる。自分の言動がよいものと思ひ込み勝ちである。この思ひ込みが自分を不自由にしてている。そこを打ち破ったところに仏法の真の大意がある。

(2) 一無位の真人

時有僧出問、如何是無位真人。師下禪牀、把住云、道道。其僧擬議。師折開云、無位真人、是什麼乾屎橛。便帰方丈。(上堂三)

一無位の真人はいかなる枠にもはまらず、一切の範疇をも

超えた自由人をいう。まさしくパラダイムにとらわれない主体性にもとづく自由な生き方をしている人間であり、あらゆる位を超えている人間である。これに対するに乾屎橛をもつてしている。かなり奇想天外である。この考え方に転換できないものが無位の真人である。また師が時に把住し、時に托開することなく、とらわれるところのない境地は、真人という語のもたらす聖なる印象からくる常識的パラダイムを打ち破り、卑俗なる言葉を駆使している。

(3) 賓主歴然

時麻谷出問、大悲千手眼、那箇是正眼、師云、大悲千手眼、那箇是正眼。速道速道。麻谷拽師下坐、麻谷却坐。師近前云、不審。

麻谷擬議。師亦拽麻谷下坐、師却坐。(上堂二)

壇上にあるものと下にあるものとは、聖なる者との俗なる者との関係にある。主と客の立場の関係にあるものが相互にいかかわる。これは二つの別の空間にあるものが、自由に互換することである。これは主客転倒である。しかもそれぞれの異なる世界にある者が、そのまま一無位の真人となる。それぞれが何のこだわりがない。事事無碍の世界である。それが賓主歴然の世界である。常にとどまるところなく変わる。これできるのはパラダイム革新があつてのことである。

(4) 家舎と途中

上堂云、一人論劫在途中、不離家舍。有一人離家舍、不在途中。那箇合受人天供養。便下坐。（上堂）

ここでの「途中」は現実の社会である。そこで衆生済度の生活を送りながら、悟りの境地を忘れない。これが「家舍を離れず」である。しかも、家舍を離れて途中の生活を送るというは、在家の生き方でありながら出家の生活である。出家仏教としての臨濟禅は僧堂での修行をもって基本としており、これを応用しての社会での「家舍を離れて途中にある」の生活もまた同じである。宗通説通といい、上求菩提下化衆生のところである。これは出家仏教といい在家仏教という考え方の枠組のクラッシュである。

(5) 真正の見解

師示衆云、道流、仏法無用功處。祇是平常無事、屙屎送尿、著衣喫飯、因來即臥。愚人笑我、智乃知焉。古人云、向外作功夫、總是痴顛漢。尔且隨書作主、立処皆真。

真正な生き方は、何物にもとらわれない当たり前の生活をする本當の自己の自己の自由自在な生き方である。それは平常無事の生き方であり、隨処に主となる生き方である。これは、決して平穩無事の生き方ではない。常に自己の意識変革の連続の日日の生活である。それが応用の学としての臨濟宗学の説くところである。

（キーワード） 応用の学、臨濟宗学、パラダイム革新、『臨濟録』
（正眼短期大学教授）

会費に関する内規

(1) 会費は、年額次の通りとする。

① 普通会员

六、五〇〇円

② 名誉会員

免除

③ 維持会員

従来の負担金額

④ 特別維持会員

五〇、〇〇〇円以上

⑤ 準会員

六、五〇〇円

(2) 本内規の変更は理事会の議決による。

(3) 本内規は平成五年五月二十二日より施行する。